

カキの変則主幹形仕立ての改善について (第1報) 仕立て方の実態について

長 田 一 美

(福岡県農業改良課)

OSADA, K.

On the Improvement of Modified Leader Type Training of Persimmon Tree

(1) On the Realities of Methods of Training.

福岡県におけるカキの整枝法は樹令15年生以下では80%前後が変則主幹形であるが、これまでの仕立て方をみると、必ずしも順調にっていないようである。とくに心抜き(延長主幹のせん除)を主体にいろいろ反省改善すべき点が多い。そこで、その実態を知るために生産地の7普及所についてのアンケート調査と現地調査を行ったので、その結果を報告する。

調査結果

1. 樹令10年生前後における心抜きの成否については、順調にいったものが極めて少く、樹勢がよいほど、耕土が深く肥よく(沃)なほど、うまく抜けていない。栽培者の整枝せん定技術については当然ながら、劣っているものほどよくない。このように、変則主幹形仕立てが技術的にかなりむずかしいことを示している。

2. 心抜きが予定どおりできなかった理由としては、心抜きによる収量の減少と栽培者の技術未熟が挙げられる。しかし、それ以上に、かつての徹底した疎植による成園化の遅かったことと、この仕立て方や心抜きの技術体系の未確立が挙げられるのは、注目に値し反省すべき点である。

3. 心の抜き方については、計画よりかなり遅れて実施したものが相当あり、なかにはいよいよになって、いきなり実施したものもある。心抜きに着手してから完了するまでの期間はふつう3年位であるが、かなり長いものが多いのは注目すべきである。その抜き方は、上方から逐年切下げるのが大部分であるが、“上方軽せん定”や“基方切上げ”、それらの併用も近年では行われるようになった。また、最終的には最上段主幹の直上で切るものがふつうであるが、近頃ではホゾを残して切口の保護をするも

のが多くなった。これらは数年前からの改善、普及の結果である。

4. 心抜き完了後の状況としては、その年のせん除量が多く、そのため樹冠が以前より小さくなるものが相当多いのは、かなり無理な抜き方をしていることを暗示している。主枝数は3~4本が多く、5本以上は少ない。心抜き完了時の樹令は9~14年生が多いが、15年生以上のものがかなり多いことは、心抜きが容易でないことを示すものである。その完了年の樹勢は以前とあまり変わらず、多くは前年と収量が変わらないとしているが、それ以上に減収としたものが上回ったのは、心抜きが順調でないことを物語っている。

5. なお、従来の変則主幹形は開心自然形に比し次のような特長があるとしている。すなわち、心抜き前の生長が盛んであり(65.7%)、収量が多い(51.4%)、しかし、樹高が高過ぎるとし(61.4%)、これまでの仕立て技術のまずさも併せて、第1主枝を含めた下枝が少ないのが問題である(55.7%)、そして、変則主幹形仕立てが技術的にもむずかしいとしているものが多い(42.8%)。

6. 以上の調査結果のほか現地での観察を生かし、また、多くの試行錯誤から現地意識に立脚した、新しい変則主幹形の仕立て方と心の抜き方を組立て、生産改善に資している。